

## ヒルファディングの最期

倉田 稔

1933年、ナチズム（国民社会主義）の政権掌握により、ルードルフ・ヒルファディング Rudolf Hilferding は、妻ローゼ（Rose または Rosa）とともに、3月21日、亡命の旅にのぼった。まずデンマークにゆき、そしてスイスへ逃れた<sup>1)</sup>。滞在の期間は不明であるが、少くとも4月13日には、ルツェルン湖（Vierwaldstättersee）のほとり Hotel Terminus にいた<sup>2)</sup>。同年チューリヒ（Zürich）に移る。その後、一時チェコスロヴァキアを訪れ、パリ、ブリュッセルに行ったことを除けば、主にチューリヒの Touring Hotel Garni<sup>3)</sup> で生活していた。かれは、1938年春パリへ移った<sup>4)</sup>。このころ、つまり3月にヒトラーは、オーストリアを併合した。ヒルファディングがスイスを出た理由は、いつスイスも罫りをすべてファシズムに占領され、それが押しよせてこないとはかぎらない<sup>5)</sup>、と思ったからである。パリで、かれは、ドイツ社会民主党のかつての国会議員で、党の外交政策の代弁者ルードルフ・ブライツァイト Rudolf Breitscheid と再び親しくなった。なお、生涯の親友でブリュンにいたオットー・バウアー Otto Bauer は、オーストリア併合の数週間後、5月にパリのへ

1) 本稿では「ルードルフ・ヒルファディングの伝記的新資料」（『三田学会雑誌』65巻10号）の§5を注記なしで利用する。ヒルファディングの伝記前半については『若きヒルファディング』丘書房（近刊）を参照。

2) 「アムステルダム社会史 国際研究所蔵、ヒルファディングの未発表手紙（目録）」（『日本社会事業大学研究紀要』第19集）

3) この名のホテルは、現在チューリヒに見当たらない。

4) Wilfried Gottschalch, *Strukturveränderungen der Gesellschaft und politisches Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding*, Berlin 1962（以下 Gottschalch と略）S. 27, 訳『ヒルファディング』ミネルヴァ書房, 1973年, 21ページ。

5) Einführung von Benedikt Kaütsky, zu: Das historische Problem. in: *Zeitschrift für Politik*, Jg. 1 (Neu Folge), Heft 4, Dez. 1954, S. 293. 訳『ヒルファディング・現代資本主義論』新評論 1983年, 189ページ。

移った。ほどなくして7月4日と5日の間の夜、かれはそこで客死している。ヒルファディングは、パリでかれと多分会ったであろう。

オーストリアを併合したヒトラーの次のねらいは、チェコスロヴァキアへの侵入であった。1938年9月のミュンヘン会談で、かれはチェコスロヴァキアのズデーテン地方の割譲を認めさせ、ドイツ軍隊は10月に侵入した。1939年3月にチェコスロヴァキアは解体した。チェコはドイツの保護領となり、スロヴァキアは名目的に独立国家になった。しかし、実際は従属した。チェコの首都プラハは、ヒトラーに占領された。

1939年8月に独ソ不可侵条約を締結し、東方に嚇威のなくなったドイツは、9月1日、ポーランドを攻撃し、第2次世界大戦がはじまった。ポーランドに勝利して、ドイツはソ連とともにそれぞれポーランドの西・東を半分づつ占領した。ドイツは、半年後、西ヨーロッパに攻撃を向ける。つまり、ヒトラーは、1940年5月、ベルギーとオランダに襲いかかり、その後、6月にかけてフランスを攻撃し、たった1ヶ月で勝利した。6月10日、フランス政府(ポール・レイノー<sup>7)</sup>内閣)は、パリからトゥール(Tours)へ、そしてボルドー(Bordeaux)へ逃れた。ファシスト・イタリアも、遅れまいとして、イギリス、フランスに宣戦布告した。6月14日、ドイツ軍はパリに入城した。6月16日、レイノー首相は辞職し、ペタン(Henri Pétain, 1856-1951)元帥が内閣主班に任命された。かれは第1次大戦で、実際は無意味だった<sup>8)</sup>ヴェルダンを守り、そのおかげで、戦時中フランス軍西部戦線総司令官となった。ペタンはこの時、閣僚の1人であって、政府部内では、戦闘を速やかに停止すべきだと主張していた敗戦主義者であったから、首相として適していた。かれはすぐ、ドイツ軍に休戦を申し入れ、22日に、休戦条約に調印した。英仏同盟は、この時期に、事実上破れた。ドイツの勝利は、これで完全なものとなった。アドルフ・ヒトラ

6) J. Braunthal, Otto Bauer. Ein Lebensbild, in: *Otto Bauer. Eine Auswahl aus seinem Lebenswerk*, Wien 1961, S. 100

7) Paul Reynaud (1878-1966)

8) テイラー『第1次世界大戦』新評論, 1982年。ペタンは、第2次大戦後、1945年に、死刑判決を受け、その後、終身刑となる。

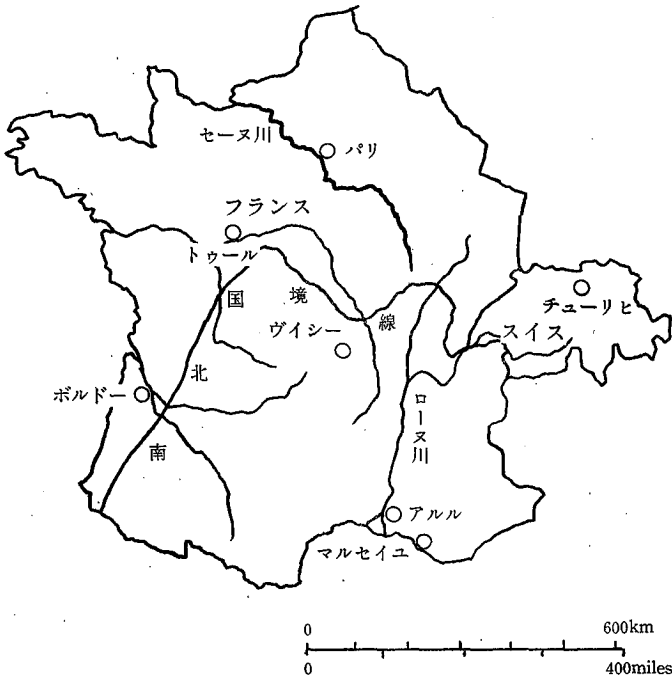
一の絶頂期が訪れた。フランスがなぜかくもあっけなく敗北したかという理由は、国際状況に大いに依存している。第1次世界戦争の時代と比較してみるとならば、第1に、イギリスが十分兵力を持っていなかった。そのために、それだけフランスを十分援護できなかった。第2に、イタリアは、第1次大戦の時に、はじめは中立国であったが、その後、協商国側（つまり英・仏など）についたのに、今回は反対に、ドイツについた。第3に、ソヴェト・ロシアがこの独仏戦の前年つまり1939年に独ソ不可侵条約を結んでおり——同時に、フランスとソ連は敵国どうしとなる——、そのためにドイツは、東部戦線に兵力をさくことなしに、西部（＝対フランス）戦線に全力を挙げることができた。さいごに、アメリカは中立を保っていた、という世界の軍事状況の大変化があったからである。

休戦条件は、フランスにとってきわめて苛酷なものであった。フランスの兵器と物資はドイツ軍にひき渡され、占領費はフランスが支払うことになった。8月8日に、1日4億フランの率で払うことが決まった。北部フランスはドイツ軍に占領され、南部フランスだけが自由地区となった（地図参照）。7月1日に、政府はヴィシー（Vichy）に移った<sup>9)</sup>。そのため、これ以降のフランス政府を、ヴィシー政府あるいはヴィシー政権という。

ペタン首相は、7月11日の法律により、国家主席、事実上の独裁者となった。かれはドイツと永続的な協商関係を結ぶ方針をとったし、また、対独戦を行なわないかぎりには、そうせざるをえなかった。こうして対独協力がおしすすめられることになる。南仏は、自由地区とはいえ、正確に言えば、半占領地区であった。なぜなら、ドイツ占領軍は、あらゆる問題でこのヴィシー政権に圧力をかけることができたし、同政権はドイツ軍の意志には逆らえなかったからである。「自由」はドイツの認める範囲内に限られていたし、ドイツは妥協をしなかった。結局、見せかけの主権が与えられたのである。

ナチス・ドイツは、ヴィシー時代にフランスを大いに収奪した。フランスの労働力と物資・軍需品をドイツに大量に送り込んだ。また、ヴィシー政権下で

9) ミシェル『ヴィシー政権』白水社、1979年。



R・I・ムーア『世界歴史地図』より

は、フランス共産党員・社会党員・人民戦線関係者は、思想犯として起訴されることになった。反ユダヤ主義者が多数、政権に参加し、反ユダヤ主義が政策に反映された。たとえば1940年10月30日に、自由地区内でもユダヤ人取締法が制定されている。

ルードルフ・ブライトシャイトと妻トニー、ヒルファディングとエリカ・ビーアマン夫人（かつての首相ヘルマン・ミュラー<sup>10)</sup>の娘で、ブライトシャイトの秘書）は、この敗戦によって、パリを逃れ、1940年7月初め、マルセイユに到着した<sup>11)</sup>。ここにヒルファディング夫人ローザが居ないことに注目した

10) Hermann Müller (1876-1931) ドイツ社会民主党員。1920年と1928~30年に二度、首相となる。ヒルファディングの友人。

11) Verein für die Geschichte der österreichischen Arbeiterbewegung (Wien) 所蔵の、無署名・無題のタイプ文書、ヒルファディングの部。(以下、VGöA と略称す)

い。実は、フランスのこの敗戦以前に、イギリスかアメリカに亡命していれば、ヒルファディングの命は助かったのであった。ヴィシー政権は、休戦条約によって、すべてのドイツ人を占領軍に引渡さねばならなかったし、またフランスに亡命していた反ナチ主義のドイツ国民をドイツに引渡すことに応ずるようになるので、かれらは危険なのであった。しかし、南仏自由地区は、文字通り「自由」だと当初思われたし、またとにかく南フランスしか当面は誰でもゆく所はなかった。かれらが港町マルセイユに来たのは、外国——おそらくアメリカ——へ船で出国しようとしたからであろう。

当局は、かれらにマルセイユ滞在許可を与えなかった。しかし、そこに留まっているのは黙認された。ブライトシャイトとヒルファディングは、アメリカ政府からの特別ヴィザを8月初めに受取った。数週間後、ピーアマン夫人も、同じヴィザを取得した。アメリカ大統領ルーズヴェルトは、事態にかんがみ、入国手続を簡素化して、緊張ヴィザを交付することを始めていた。

ゴットシャルクは、妙なことを書いている。ヒルファディングもブライトシャイトもチェコスロヴァキアの旅券もヴィザも取得していた。ないのは入国許可証だけであった、と<sup>12)</sup>。これは、あたかもヒルファディングがチェコスロヴァキア行きを考えていたようである。実は、アメリカ行きを考えていたのであった。チェコ占領の前であれば、かれも考ええたであろう。しかし、その後はナチズムに占領されていて危険なので、ありえない。

9月に、SPD 党员アレクサンダー・シュタインはマルセイユでヒルファディングと会い、数時間話した。かれは、アメリカ行きを速めるようヒルファディングにすすめた。ユダヤ労働者委員会とアメリカ労働組合とが一語に起こした「救援行動」(会) を実行する若干の友人たちが、とくに脅やかされていたヒルファディングとブライトシャイトの出発に、献身的に努力した。ヒルファディングは、とても重苦しく、打ちのめされた印象を与えていたが、はじめに機会が来たときにフランスを去ると、シュタインに約束した。かれらは、大陸を離

12) Gottschalch, S. 30, 訳, 24 ページ。

れようと相当試みた<sup>13)</sup>。しかし、出発は長ながと延びた。その理由として、ヒルファディングとブライトシャイトがスペイン経由で通過すれば、逮捕されるという想定があったからである。スペインは、当時フランコ独裁の国であった。ワシントンからの強い圧力のために、数週間後、ヴィシー政府は、両人をオラン<sup>14)</sup>—カサブランカ<sup>15)</sup>経由で出発する許可を与えた。

準備はすべて出来、席は予約され、ヴィザは承認された。ヒルファディングたちが出発しようとしたその日に、ブライトシャイトが2日おくれて出発することになった（この点は、文書<sup>16)</sup>では、ブライトシャイトだけのように書かれてあるが、二人ともではないのか、はっきりしない）。つまり、両人が数時間以内にマルセイユを離れ、小さな隣町アルル Arles にゆくよう、マルセイユの知事が指令したのである。この処理の公式理由は、全然知らされなかった。警察は、アルルのどこそこのホテルに滞在せよと、かれらに告げた。それは「ホテル・デュ・フォルム」Hotel du Forum という名のホテルであった。フランス警察が駅へ連れてゆき、かれらのフランス旅券が差押えられた。しかし、アメリカの旅券（ヴィザ）は持ってよいこととなった。

アルル滞在の時期に、2人は、図書館で研究や討論をつづけていた。ヒルファディングは、ここで、未完の論文で遺稿「歴史の問題<sup>17)</sup>」を書いた。この作品に関わる想い出を、トニー・ゼンダーがこう書いている。——第1次大戦勃発の直前にゼンダーはヒルファディングとパリで最後に会った。ヒルファディングはフランスを大変愛していた。そして当時の時代の複雑な問題について生き生きした思想で満たされた人物という印象を与えた。2人は、新しい事態と、最近の時代の経験がものを考える人ならだれにも迫っている認識について語った。ゼンダーは、社会主義者としてこれら新しい問題に対して立場をとる、新しいスタンダードな作品を書いてくれるよう、かれに頼んだ。ヒルファ

13) Alexander Stein, *Rudolf Hilferding und die deutsche Arbeiterbewegung*. Hamburg 1946. S. 43.

14) オランは、アルジェリア（仏領）の地中海沿いの港町。

15) カサブランカは、仏領モロッコの大西洋側の港町。

16) VG&A

17) Das historische Problem, 注5)を見よ。邦訳、前掲書第V部に所収。

ディングは、そうすると約束した。かれは、その約束を守ろうとも試みた。この着手された新しい作品の原稿は、ある。ヒルファディング夫人<sup>18)</sup>がそれを、野蛮人の手から救ったのである<sup>19)</sup>。——ここに言われる作品は、この「歴史の問題」であるとして、ほとんど間違いがなかろう。

ヒルファディングは、ペタン政府がドイツ軍に対してフランスの領土を完全に護ることができると言う確約を半分は信じ、また半分は、自分は逃れられない運命だと、つまりペタン政府が南フランスからの逃亡を決定してくれないだろうと考え、一種の運命的な屈服をしており、かれはブライトシャイトとともに、悲劇的な心の葛藤をしていた<sup>20)</sup>。

ヴィシー政権については、幾つか述べておきたい。まず、この政権は、二つの時期に区分できる。つまり、1942年11月に、ドイツ軍は、南部自由地区を占領してしまったので、ヴィシー政権の後半期は、自由は失われたとという。それでは前半期はどうであったか。形式の上では、また建前では、自由であって、またそれを人びとは半ば信じていたし、あるいは信じたいと思っていた。だが、反面、ドイツとの協力関係を維持しようとして、その意を迎えるために、ヴィシー政権は、自発的に占領軍に協力しようと思っていたので、実は、ヒルファディングらにとって客観的にはきわめて危険であった。それを、その後の事実が立証するであろう。とくにヒルファディングは、社会民主主義者であるとともに、ユダヤ人であり、また、不幸にも、有名でありすぎた。

ブライトシャイトとヒルファディングは、出国許可を得ようと努力を続けた。かれらはアメリカやその他の国々に個人的な友人に問い合わせ、かれらの知っているフランスの公的人物に援助を乞うた。かれらの許可をえるために、かつてのドイツ首相で、ヒルファディングの長年の友人、ハインリヒ・ブリューニング<sup>21)</sup>が、アメリカの当局や有力なフランスの人物、ワシントンのフ

18) ヒルファディング夫人は、ここに同伴していなかったはずである。

19) Tony Sender, Gedenkblatt für Rudolf Hilferding, in: *Volkszeitung*. 10, Jg., No. 39, 27, Sep. 1941.

20) B. Kautsky, op. cit. 訳, 同ページ。

21) Heinrich Brüning (1885-1970) 中央党政政治家, 1930年首相, 1934年ナチスのためアメリカに亡命, 戦後帰国する。

ランス大使にかけ合った。ブリューニングはまた、ピエール・ラヴァル<sup>22)</sup>に、ラヴァルの娘を通じて頼み込んだ。ラヴァルは、6月23日にヴィシー政権の國務大臣兼副首になり、その後、外相をつとめた政治家である。1940年7月から12月まで、フランスを事実上指導していたのは、かれとペタンであった。しかし、12月13日、ラヴァル多相は解任された。ヒルファディングは、すでに以前から、ラヴァルに手紙を書いていたが、返事を貰っていなかった。ブライトシャイトは、フランダン (Flandin) に手紙を書いたし、ほかの友人たちは一層努力した。フランダンは、戦前からの政治家で、ラヴァルの後任として、少しの間、外相をつとめた。

1月20日ごろワシントンで、ブリューニングは、ヒルファディングの出発ヴィザが許可された、と聞いた。かれはこの知らせを友人によってヨーロッパに打電させた。

同時にブライトシャイトは、アルルの地方長官にたずねた。もしブライトシャイトとヒルファディングが正式に出国ヴィザの申請をすると、危険だと見るかどうか、そのような申請はドイツ軍にとどいてしまうのかどうか、そしてさいごに、地方長官は、申請を出すことを賢明だと思うかどうか、と。

地方長官は、ヴィシーに問い合わせようと答えた。2日後かれは、自分の秘書を通じてブライトシャイトに、まったく危険はないし、出国ヴィザ申請をすぐ出してよい、と知らせた。数時間後かれは、ブライトシャイト本人を訪ねて、ヴィシー政府がかれらに出国ヴィザを許可したので、それをヴィシーに申請する必要はもうないし、マルセイユへ行き、そこで受領できる、と語った。マルセイユ警察の旅券課の主任が、ブライトシャイトとヒルファディングのために、一定の法的手続きを果すために、自分からアルルへ出向いてきた。1941年1月27日にブライトシャイト、ヒルファディング、ピーアマン夫人はみな、監視なしで、マルセイユにゆき、4つの出国ヴィザを市庁で受取った。ヴィザ

22) Pierre Laval, 1883-1945.

フランスの政治家、1914~19 社会党下院議員、1924~27 独立社会党議員、その後、右傾化する、1935~36 首相、1940 ヴィシー政府の國務相・副首相、解任され、その後42年に首相、1945年に逃亡、しかし銃殺される。



はかれらの旅券に押しあてられていた。かれらには船会社へのあつ薦がなされ、スペイン国境を越えることは禁止された。マルティニク<sup>23)</sup>経由の路をとりなさいと言われた。ブライトシャイトは、警察署長に迎えられ、署長はしばし政治について語り、援助と保護を確約した。ヒルファディングの費用は、ブリューニングが支払った。マルティニクゆきの次の船は、2月4日に出航することになっていた。この船は、船室に空きがなく、1つの寢室に席(複数)があるだけであった。会社側が、この席はとれないと言った。ヒルファディングはこの船に乗ろうと決心したにもかかわらず、他の3人は、その次の2月18日の船を利用しようといった。かれはそのため、やむなく三人に従った。実はこれで最後の可能性が、みすみす消えてしまったのである。

1月31日に、つまり出発の前に、ブライトシャイトとヒルファディングは、地方長官から、2人の出国ヴィザが解消されていること、だが、女性たちのヴィザは依然有効である、と知らされていた。アルルの地方長官もマルセイユの知事も、この措置に説明はできなかった。「ヴィシーの指令」というのがすべてであった。再びかれらは、アルルに連れ戻された。地方長官は、以前のように大変愛想がよく、かれらがかれの個人的保護の下にあり、恐れるべきことは何もない、とくり返し保証した。かれは、ドイツ人によってフランスの自由地帯が占領された場合でさえ、かれらを気づかうし、安全を守ると、以前の説明をくり返した。それをかれは名誉にかけて誓った。

数日後、ブライトシャイトとヒルファディングは、はじめて、警察の直接監視下におかれた。ブライトシャイトは、この処置の理由を地方長官にたずねた。おそらく、誤解のために起きたと言われ、監視は止んだ<sup>24)</sup>。しかし、これはおそらく、誤解ではなかったであろう。その間、ブライトシャイト夫人とボーアマン夫人は、両男性の「旅券」を戻してもらうため、地方長官の所へ行った。かれは、このとき、大層親切に、両人は守られるでしょうと、確約した。

1941年2月9日、土曜日、夜11時と12時の間に、2名の警官と1名の特別

23) 小アンチトル諸島(西インド諸島)の1つ、マルティニク島。フランス領。

24) VG&A

警視がブライトシャイトとヒルファディングの住んでいたアルルのホテル・ドゥ・フォルムに来た。そこで警察官たちはこう言った。

「ゲシュタポ<sup>25)</sup>がブライトシャイトさんとヒルファディングさんの住所を見つけ、アルルの途中まで来ています。1時間以内にお二人を逮捕するつもりになっています。」

そしてこう説明した。

「我われ警察は、貴方がたを保護するために来ました。我われは貴方がたを保護します。貴方がたは数日間隠され、その後、スペインのヴィザを取得し、出発が援助されるでしょう。」

ブライトシャイトはたずねた。

「アルルの地方長官とマルセイユの知事は、この新しい事態を知っているのか？」

「もちろん、知りません。」

そこでブライトシャイトは質問した。

「これからどうなるのか？」

特別警視はこう返事をした。

「我われは貴方がたを、ヴィシーの保安警察 (sureté) に連れてゆきます。」

ブライトシャイトは、驚ろいて叫んだ。

「それでは、つまり、我われを引渡そうということだな。」

かれは答えた。

「貴方はフランスをずいぶんくびっておいでですな。ブライトシャイトさん。」

警視たちは、ことこまかに説明した。この会話は1時間続いた。そして二人の恐れは和らげられ、2人は抵抗せずに、連れてゆかれることを了承した。しかし、これはいつわりであったことがわかる。

かれらは、ホテルの中へ房され、そこで直ぐに荷物をまとめた。警察官は、言った。

「所持金を全部もって行って下さい。ただし、自動車の座席が狭いので、衣

25) Geheime Staatspolizei. ナチスの秘密国家警察。

類はほんの少しだけにして下さい。なお、お金は大変役に立つでしょう。」

ブライトシャイトとヒルファディングは、警察を信じ、旅の用意をした。

「私も、この2人と一語にどうしても行きます。」とブライトシャイト夫人は、主張した。警察は、かの女を連れてゆくことを拒否したが、それでもついに折れて認めた。

真夜中、かれらは2台の車でヴィシーに向けて走った。運転手と警察官以外は、ブライトシャイトと夫人、そしてヒルファディングだけが乗った。ピーアマン夫人はアルルに残った。かれら三人は、日曜日、朝11時ごろヴィシーに到着した。ブライトシャイトとヒルファディングは、保安警察につれて行かれた<sup>26)</sup>。ここでナチの親衛隊総突撃本部長兼ベタン政府保安警察統一指導者フーゴー・ガイスラーが迎えた<sup>27)</sup>のである。二人はきわめて厳しく監視された。ブライトシャイト夫人は釈放されたが、どんなに努力しても、兩人に会う許可は得られなかった。ブライトシャイトとヒルファディングは、保安警察で、犯罪者のようなひどい扱いを受けた。かれらは部屋を別べつにされ、私物を全部と、自殺のできる物はみな、とり上げられた。10日夕方7時ごろ、ブライトシャイトとヒルファディングは、ドイツへの引渡しを公式に言いわたされた。かれらは大いに驚ろいたが、勇気を出してその通知をうけとった。それはこうあった。ドイツ政府は1940年12月17日にかれらの引渡しを求め、そしてその日から3度もその希望はくりかえされていた、と。保安警察は、テュッセン<sup>28)</sup>も引渡されているし、かれが妻とともにドイツで監視下にある、と言った。かれらは、警察との会話から、同じ運命が待っていると察知した。2人は、寝るためではない汚い部屋に閉じこめられ、わらの上で寝た。そして翌日(11日)は、洗顔とひげそりが許されなかったのである。

ブライトシャイト夫人はすぐ、アメリカ大使館<sup>29)</sup>と接触しようと努力したが、だれと話すことも成功しなかった。かの女は、大使館あてに報告を書いて

26) VGöA

27) Gottschalch, S. 31, 訳, 25ページ。

28) Fritz Tyssen 大工業資大家、一時ナチスに協力。

29) 駐ヴィシー・アメリカ大使は、リーヒ提督。

送り、さらに夫と話せるよう試みた。10時ごろ、かの女はアメリカ大使館に戻ってきたが、誰とも話せなかった。夫人は、それから内務大臣と話そうとした。ヴィシー政権では、内務大臣が猫の目のように交代していた。かの女は、門衛の所へ行って、面会申し込み用紙に書いて、渡した。「ブライトシャイトとヒルファディングを引渡して載せたく、訪れました」と申し出た。門衛は驚いて、「貴方は、それを私が大臣に伝えると、まじめに考えているのではないでしょうね?」と言って、申込用紙を破ってしまった。こうして、ブライトシャイト夫人は大臣と語ることはできなかった。

月曜日、2月10日、午後5時。ブライトシャイト夫人は、夫に会おうと思って、保安警察に戻って来た。かの女は、保安警察の前の道を2時間も行った戻ったりして、ついに、「静かに」話すこと、という条件で、夫に会う許可を貰った。ブライトシャイトは、未来に幻想を持っておらず、再び勇気の証しを示した。ブライトシャイト夫人は、どのみち決定がでるまでヴィシーに留まろうと決心した。

アメリカ大使館が月曜日中ブライトシャイトとヒルファディングのために企てたいろいろな干渉は失敗した。大使館は、両人がアメリカ人ではないので、フランス政府に介入しないと決めた。

12日<sup>30)</sup>、火曜日朝11時、保安警察から2台の車が出発した。ブライトシャイトとヒルファディングを別べつにのせた自動車であった。かれらは、占領地区と非占領地区を分けている境界へついた。これは、事実上の国境であり、これの出入りはドイツ占領軍の意のままであった。かれらは、ここでヴィシー政権の役人から、ドイツ当局のゲシュタポの出先機関に引き渡されたのである。

ゲシュタポはすぐ2人を2台の自動車でパリへ連行した。この途中、ヒルファディングは、ゲシュタポにおそろしいほど殴られた。2人はパリのラ・サンテ<sup>31)</sup> La Santé 監獄へ連れてゆかれた。翌朝、ブライトシャイトは、第1回目

30) VG&A の記述にしたがう。しかし Stein は、11日である、と。

31) 現在は、精神病院になっている。rue de la Santé にある。政治犯、未決囚の刑務所、1867年につくられた。精神病院が改造され、その後、大きくなっている。レジスタンス時代、多くの政治犯がここに捕えられた。高く厚いコンクリートの塀に囲まれ、

の尋問にひき出された。かれを連れて来たゲシュタポの役人が、ここでこう言ったのを、ブライトシャイトは聞いた。「もう1人のほうは連れてこら<sup>32)</sup>れなかった。」この間、何が起きたのか、誰もはっきり確認はできない<sup>33)</sup>。多分、12日の夜か13日の朝に、ヒルファディングは死んだのであろう。

ウィルヘルム・ヘクナーは、ヒルファディングが尋問を受けたあと、ゲシュタポによって窓からつき落された、という。しかし、おそらくかれは、自分の訊問を受ける前に死んだのであろう、と思われる。1941年9月17日ベルリン発電報は、かれが監獄の房で自殺したことを知らせた<sup>34)</sup>。クルト・ケルシュテンは、おそらく服毒自殺をしたのだらうと、書いている<sup>35)</sup>。同じく Dr. ピーター・ミルフォード<sup>36)</sup>は、ブライトシャイト夫人から、「服毒自殺をしたと信じる」と、告げられている。

ラ・サンテ監獄からヒルファディングは、ブッヘンヴァルト強制収容所<sup>37)</sup>に送られるはずであった。ブライトシャイトは、その通り送られた。そして、1943年に方法は分らないが殺された。現在、ブッヘンヴァルトには、かれの記念碑がある。ヒルファディングについては、一部に、1943年死亡説が<sup>38)</sup>ある。これは、ブライトシャイトと混同したものであろう。あるいは、ヒルファディングがブライトシャイトと一諸に連行されたとうっかり思い込んだ誤りであろう。シュタインに報告を書いた人(不明)は、ヒルファディングが、衣服に隠しておいた多量のヴェロナール(睡眠薬)を吞んで自殺したと、想定している。読者はかれがウィーン大学医学部卒の医者であることを想いおこすであろう。しかしこれがたとえ正しいとしても、途中で体験した虐待によってヒル

広い敷地を持っている。(高橋純氏に幾つか教えをうけた。)

32) 原語は、hochkriegen. 上の方へ連れてゆく、もってゆく、という意味で、荒い表現。「しょっぴいて来る」と訳せるかもしれない。大塚譲氏の助力を得た。

33) VG&A

34) *Encyclopaedia Britannica*, Vol. 11, 1963.

35) Gottschalch, *op. cit.*.

36) ヒルファディングの第2実子。

37) 現在のドイツ民主共和国、ワイマールの近郊にある。

38) 1943年説は、大島清「ヒルファディング」(『経済学説全集』第8巻、河出書房 1956年)、や岡崎訳『金融資本論』上 岩波文庫 1982年、『経済学事典』平凡社 1969年、で採用されている。もちろん誤り。なお、林要氏は、縊死説を暗示されている(『金

ファディングが自殺するに至ったことは仮定される。かれは、ドイツへ送られたなら、ユダヤ人として社会主義者として何が待ちうけているかを、知っていた。かれがほとんど毎号寄稿していた亡命ドイツ社会民主党機関紙『ノイエル・フォルヴェルツ』(Neuer Vorwärts)は、ナチズムの残虐さと強制収容所について多くの報道をしていた。それゆえかれは、ゲシュタポの死刑執行人によって殺されるのではなく、自分で命を断つ方を選んだのであった<sup>39)</sup>。

---

融資本論』大月書店、1972年版、2ページ)。大島氏は、*Handwörterbuch der Sozialwissenschaft* のゲルバード・スターフェンハーゲンの1943年説、および『ニューヨーク・タイムス』の「首をつって死んだ」という報道を、紹介している(99ページ)。  
39) Stein, *op. cit.*, S. 44.